

年譜

時 代	記 事 (年令は時代と一致す)
明治元年 (西暦一八六八年)	○六月八日長野県北佐久郡横鳥村大字山部(現立科町)丈左衛門三男として出生(但戸籍簿には六月十五日出生とあり)時に父四十九才母四十四才○父を失う
一二年 年月不詳	○北佐久郡山部村小学校卒業○授業生として山部小学校に奉職(月俸五拾錢)○北佐久郡茂田村昭明学校に奉職○津金寺の嗣僧林長誨と共に令兄丈之助について漢籍を学ぶ○上田町儒者恒川重遠(母方の遠縁)の門に学ぶ
明治一九年	○在松本長野県師範学校入学(この年長野へ移る)○在学中宣教師ダンロップ氏について特に英語を学び原書を繙く○休暇を利用して屢々独自で実地見学旅行をなす○卒業生に対する俸給平等運動を推進す○母を失う(この後常に母の肌着を身につけ父母の位碑と共に在り)
二三年	○夏期休業を利用して学友古川竹次郎と越後方面を旅行し下水内柳原村富倉の石油を探集す
一四年	○三月同校卒業○下水内郡飯山小学校に奉職同町真宗寺に下宿し読書に専念し時に山野を跋涉し教授用の標本などを採集す
二五年	○六月小県郡東塩田小学校に転任

二六年 二八年 二九年 二〇〇年	○四月同郡本原小学校に転任○余暇に植物昆虫などの採集に熱中○收穫休みに南佐久大日向方面に鉱物採集旅行をなし二三十個の標本を得て職員会総会にて発表演説を行う ○四月同郡武石小学校転任○同所に於て綠簾石(地方名焼餅石)ヲ発見学界に発表○浦里村にて玄能石を発見す○この頃より小藤文治郎神保小虎両博士をはじめ多くの学者学生の来訪をうく以後神保博士につき地質学結晶学を学ぶ ○四月同校小学校長○長野県小県郡鉱物標本目録を日本地質学雑誌(明治二九・七月号)に発表○学校新聞を発行し父母との連絡を計る但し後新聞法違反なりとして処罰をうく○この校在職中機業染色養蜂植林治水等の改良普及に尽力す ○全国の教育産業の実体を視察し郷土の進展を計らんとし筆墨行商を資にして日本全国漫遊の志を抱く
二一年 二二年 二三年 二四年	○夏期數十日を費し東信地方に大採集を行ふ ○四月上水内郡大豆島小学校長に転任(高等科併置の初代校長)○部落特設の分教場を廃止し児童を本校に収容す○当局村民の反感のうちに強力な差別徹廃の開放運動を起しました部落民の生産生計の向上に勉む○部落民と共に校庭に大いに植
二五年	
二六年	

樹をなす ○長野県機業振興の会を作り六月柴崎

虎五郎と機業地桐生足利へ視察を行う ○機織染

色の標本を作製県下に頒布す ○村の産業の進歩

労働力の向上副業奨励に力をいたす ○この頃より信州大学及び信州博物館設立の構想を叫ぶ

三三年
○十月郷里北佐久郡蓼科小学校長兼蓼科農學校長に転任 ○この年パリーに催された万国博覽会に

五無齋採集の十三種の鉱物を出品す ○寛聚院に自炊し生徒をはじめ一般に対し殖産興業の指導に

当り諸方面に実践活動をなす ○渡辺国武子の筆による大鷲紙五枚の大額面を

掲げ講堂建築の促進を計る 「蓼科学校」これなり

現在蓼科高校に存す ○三月「人の子を賊なう」との退職届を提出して退職 在職年数満十年この間必ず毎年數十日の研究調査旅行をなしている

○一時家居 ○五月一日友人知己の助力を得て第一回県下漫遊の途に上り鉱物採集を行ひ又時に講演をなし翌年十一月漫遊を終る この間三百種類

三万余塊に上る標本を採集し採集地の岩面に九曜星の家紋を刻すその数三百余ヶ所にのぼる ○帝

大博物館其の他へ採集物を献納震災予防調査会並に県知事より褒賞をうく

○夏八月矢部長克博士らと共に白馬杓子鑓ヶ岳等の連山を踏破す ○鉱物標本の整理をなす ○学校教師の修学旅行の奨励を唱導す

○一月九日より四月十六日まで信毎紙上に「通俗

樹木下部 ○春秋の花鳥草木の歌謡 ○春の花鳥草木の歌謡 ○秋の花鳥草木の歌謡

三四年
○春の花鳥草木の歌謡 ○秋の花鳥草木の歌謡

三五年
○春の花鳥草木の歌謡 ○秋の花鳥草木の歌謡

三六年
○春の花鳥草木の歌謡 ○秋の花鳥草木の歌謡

三七年
○春の花鳥草木の歌謡 ○秋の花鳥草木の歌謡

三八年
○春の花鳥草木の歌謡 ○秋の花鳥草木の歌謡

滑稽信州地質学の話」を連載好評をうく ○十月長野県地學標本百組を県下各学校に寄贈 又各所に地學講習会を行ふ ○冬季蓼科農學校別科生教授として別科生担任 ○青年教育の実態を通して私塾開設の構想をねる

○五月貧困にして中等教育を完全に授けられざる青少年のために保科塾(後私立速成中學保科塾)を長野市長門町の一小屋に開設(後横沢町・妻科等へ移転)授業料月二錢(後五錢)より百円まで教師及教科書は國語中學校國文教科書(一)一(○)常山紀談・国文字・保元物語抄・平治物語抄・平家物語抄・徒然草・手紙の文(保科)漢文近古史談全・中學校漢字讀本二三・四書・文章軌範(保科)英語科ナショナルリーダー一(四)・グラシマ一二冊(風間礼助(冠峯)小池久吾丸山弁三郎)數学科中學校算術教科書上下・中學校代數教科書上下・統代数・平面幾何学(藤森良蔵後に出席浦四郎)其の他地理動植物の実地講話名士の講話 ○この年の書簡には生徒百四十名長野中學四年生三五名通学とあり 又池内正道氏(現存)によれば保科塾の生徒で海兵の一次に一所に合格したという話 ○小中高大學の授業料を全廃し教科書学用品の公費支弁を論じその一角を実現す ○小学校一學級生徒数の縮少を県是とすべきを提唱 ○修身科廃止を叫ぶ ○風間冠峰と共に鑓ヶ岳に登山董青石發見 ○満韓視察を画し資金を得て先

三八年

三九年

ず数千の教師を彼地へ送り十ヶ年彼地を研究せしめて文化的素地を作り後数万の貧窮者を送るべしとなす
○諫訪郡及び県下各所に講演講習を開き郡産の標本を各校へ配布
○長野高等女学校へ岩石標本一千四百点を寄贈せる廉により銀杯壹個下賜せらる
○保科塾妻科時代に家鴨の雛を越後より購入し之を飼育して肉を配給塾の収入の途を計る
○朝鮮人其他苦学生を養成し生徒は東北信より集まる
○夏八月突如保科塾を閉塾す
○信濃教育会付属図書館設立のため昼夜奔走す
○十一月三日狂歌集「よいかゝをほしな百首け」を刊行
○二月二十一日東京市を発し板橋駅より始めて赤い小車を軋らせつゝ中仙道を下り筆墨行商をはじめ佐久小県を経て長野にむかうこの途中郷里吉村源太郎氏宅にて宿に落つ
○四月信濃教育会付属図書館に蔵書（令兄丈之助の分も併せ）三千余冊を寄附し創設に貢献す（現在長野図書館に肖像を掲ぐ）
○六月十五日信濃教育会付属図書館（現県立長野図書館の前身）の開館
○衆議院議員補欠選挙に立候補
○九月十九日衆議院議員補欠選挙執行日 同二十三日諫訪の旅先にて信毎の發表を見自分の得票数二十三票を得て「うれしきこと限りなし」と記している
○九月十九日より十二月二十二日まで南信諫訪上下伊那方面を筆墨

行商し各所にて講演をなす その記事は売上帳三（一名筆壳日記）として残されている
○十月十九日夜南向の白木屋旅舎の二階より墜ち負傷
○一月十五日旅先にて郷里の同族勝次氏より筆墨商資金参百円無尽が全会一致で掛け捨てになりた
りとの書面到着し感激してよろこぶ
○十一月十九日天竜峡より開喜寺に遊ぶ詩を草す
○読売新聞に連載された日本百奇人の中で第一位に当選
○上伊那郡産岩石鉱物標本を作り同郡各学校に頒布また各地に講演をなす
○十一月三日週刊紙信濃公論創刊編輯兼發行人保科百助 印刷人清水龜之助 発行所長野市新田町五十一番地信濃公論社
○十一月三十日より十二月十四日まで上下水内上下高井方面にて講演に招かれ筆墨行商をなしつつ巡回す
○信濃川治水問題 育豚論或いは日暮硯など隨所に熱演す
○過労に加えて雪道のため眼疾となり十二月十日野沢温泉にてはじめて片桐国手の治療を受く
○十二月九日より公論紙上（第六号より）にこの旅行記を巡業日記として発表
○庶物標本二十四種類の製造配布を企図し各学校一般民に实物教育の実をあげんとす

四一年

四二年

○一月二十九日眼疾は黒内障と決定 赤十字病院にて治療を受く 二月中旬より快方に向う これを病床日記として公論に発表 ○おもちゃ用鉱物標本壳出し規則・おもちゃ用鉱物標本説明・地学標本壳出

四四年
(西暦一九一一年)

事項の關係

- 五月二十五日発病同三十一日長野日赤病院に入院病名脳動脈栓塞 ○県知事大山綱吉氏以下多数の人々の見舞をうく ○六月七日午前九時二十分逝去 ○六月八日長野市寛慶寺において仏葬戒名は地学院五無齋悟道明保居士
- 明治四十五年五月五日北佐久郡横鳥村津金寺境内に五無齋記念碑建立渡辺敏書 ○明治四十五年六月七日長野市加茂に五無齋記念碑建立渡辺国武書 ○昭和四年一月一日信濃教育五無齋特輯号發行(第五〇七号) ○昭和十一年六月売上帳三を写真印刷し筆売日記と銘して信濃郷土研究会より刊行
- 昭和三十一年九月十日「人間保科五無齋」荒木茂平著が刊行 ○昭和三十六年十一月十八日北佐久教育会主催信教及び立科町後援のもとに立科町津金寺五無齋碑前及西小学校にて五無齋没後五十周年忌法要遺墨遺品資料展覧会並に座談会を開催
- 同年十二月三十日北佐久教育会報五無齋顕彰記念特輯号發行 ○昭和三十九年二月五無齋保科百助全集刊行(佐久教育会編)

四三年

- 一月一日信州産岩石礫物説明書を長野市清水活版所より発行 ○一月二十九日岩石礫物新案教授法第一編(一名ニギリギン式教授法)を東京秀英社より出版 ○二月二十八日百万分一長野県地質図を東京光風館より発行 ○地学標本六百組を作製全国的に配布を計る ○肥料標本外十数種の標本を作製し之が販売に尽力す 県下各地にて講演を行ふ ○十二月信濃公論休刊

あとがき

一 経 過

五無斎の調査研究は遅々として進まなかつたが、思えば長い間、であつた。五無斎の事蹟を公にしてよるとする仕事は、そもそも昭和二十四年北佐久郡志編纂事業計画の中の一つかあつたのがはじまりである。北佐久に於ける文化人の事蹟のうち用水関係者は簡単ではあつたが、一応郡志に收められた。併し他は調査の未完と紙面の都合で次の機会にゆずられた。従つて五無斎の研究も会の事業としては中断された形ではあつたが、一般の人々の間では関心が深く中でも浅科村小泉陸太郎氏（農）は「師範出身の異彩なる人物」を著され、又昭和二十九年に横島小学校（現立科西小学校）へ赴任された校長山浦甫氏は学校教育の中に五無斎の事蹟や人となりなどを採り入れ、又着々資料の蒐集につとめ、同三十年十一月十六日から十八日まで自校主催で村内の資料をあつめて五無斎資料展覽会並びに座談会を開いて一般に公開されたことなど、五無斎の郷里に近い人々の間には脈々として相通ずるものがあつたのである。この展覽会に出品された資料の存在は後の研究に大きななかりとなつたことはまことに有難いことであつた。その後引き継がれた同校中沢英男校長は誠意このことに当られ、それに刺戟もされて川西地区十ヶ村学校職員会では保科五無斎研究委員会を作つて研究を重ね事蹟顕彰の実現に努め、その後郡教育会において

も保科五無斎研究調査委員会を結成し両者相俟つて仕事がすすめられた。昭和三十六年はあたかも保科五無斎没後五十年忌に相当する機に会し、保科五無斎顕彰のため、「五十年祭を営むこと二、遺墨遺品展覧会及び座談会を開くこと 三、遺稿集を編集刊行することなどを決定し、着々準備をすすめて同年十一月十八日北佐久教育会が主催し信濃教育会と立科町後援のもとに立科町津金寺五無斎記念碑前及び西小学校で式典並びに展覧会座談会が催され（編集十二参照）同年十二月北佐久教育会報五無斎記念特輯号として発刊し当日の模様を発表したのであつた。委員会はこの頃から活発化し、委員長甘利忠孝はじめ委員清水憲雄、中沢英男、尾沼英四、清野房太、白倉盛男、井出悦夫、今井誠太郎の諸氏をはじめ、淨書化協力者として丸山宏、横関重一、白鳥一誠、大森浩、原幸司、田口みき子諸氏ならびに立科町小中四校の職員諸氏の熱誠と協力により資料の整備と原稿化につとめること満二年。新聞雑誌をはじめ直筆資料の原稿化には並々ならぬものがあつたのであるがよくこれに堪えて完成につくされたのであり、一応の原稿が整い原稿紙千数百枚に及ぶ仕事を終つて、編集刊行の委員会へ引き渡されたのは昨年の七月十三日のことであつた。それから編集がはじまり編集委員会は前記調査研究委員会の委員によつて構成され、刊行委員会は北沢潔司、土屋甚次郎、古清水武雄、甘利忠孝の諸氏があたり、青木会長は之を統轄するという陣立を持つてすすみ、この度発刊のはこびとなつたのである。この一連の長い間の仕事の陰には直接の責任者は兎に角として郡内外の多くの人々による激励と後援とがどんなに大きな力になつたことか

と今更ながら編集の一人として感謝するところである。

二一 資料について

五無斎が自ら発刊して世に公にした著書には「信州産岩石鉱物標本説明書」「信州産岩石鉱物新案教授法」「かかあほしな百首け」などがあり、他によつて公にされたものには所謂筆売日記と称する「売上帳三」や「信濃教育五無斎特輯第五〇七号」などがある。然るに、五無斎と言えば「我死なば……」の遺言の歌と共に「ニギリギン式」とか「筆売り」という皮相の理解で評価され、五無斎の本心に触れることが薄い感があつた。この全集には前記のものは勿論大切な資料ではあつたが、これら以外のものとして長野新聞、信濃毎日新聞、信濃公論、諸書簡類などに掲載されたものが主軸となり、五無斎を知りその本質をつかみまた五無斎を研究する上に貴重な資料となつたことは幸なことであつた。

明治三十八年の長野新聞は信濃教育会参考室の岩石鉱物標本箱の中に保存されておつたものであり、明治三十六年の信濃毎日新聞は同じく信濃教育会の倉庫より発見したもので共に重要資料となつたもので、新聞社、図書館などでついに探し得なかつたものを探し出し重要資料として加えることの出来た清水井出両委員の苦心は忘れることは出来ない。信濃公論は立科町片桐銀次氏の所蔵されておつたもので僅かの欠号を除いて大部分が今日迄大切に保存されていたことは（北佐久教育会報五無斎特輯号昭三六、一二、二〇参照）天恵とも謂うべきであつて本書に幾多の得難い資料を提供してくれたものであつた。信濃公論は明治四十一年十一月三日天長の佳節を期して創刊号を発行、明治四十三年十二月をもつて休刊となつてゐる週刊紙である。欠号は創刊号より五号まで、四一号、五一号より五十六号まで、六一号、六五号より五号まで、八三号から九四号まで、九六号より休刊までであり、一部面の欠号としては四六、四七、四九、五〇、六三、七二、八二の各号である。片桐氏所蔵の最後の号は九五号で明治四十三年九月十五日附であるから休刊までおそらく十号以上は刊行されたと推測される。片桐氏によれば、片桐氏は明治三十六年五無斎が一時郷里の蓼科農学校で冬期別科生教諭として担任した別科生の一人であつてこの時の青年に対する天の啓示のようなものが翌年保科塾になつたようであるとされており、後の入営當時公論や雑誌を私に送つて下さり隊の者は皆偉い人だと言つて回覧などしその為に紛失などもまぬがれなかつた、と話されている。信濃教育会所蔵の「信濃公論購読者芳名録明治四十一年十一月三日、信濃公論社」なる二冊から成る記録帳によれば、第一号には、一金六拾五錢第二十七号まで半ヶ年分、県町、馬歳次といふ記入の仕方で、長野市分七十九名の記名があり、一金二円二十錢也、一ヶ年分、東筑摩本洗馬長興寺、外東筑分として十四名の記名があり、松本五名、南佐久十二名、北佐久二十名、小県三十九名、諫訪八名、上伊那十五名、下伊那三名、西筑摩七名、南安曇九名、北安曇四名、更級十三名、埴科十七名、上高井十二名、下高井四十名、上水内六十五名、下水内三十一名、他府県十六名と金額氏名が連記され、同二号には小県郡四十三名、長野市五十七名が連記名されているので寄贈分宣伝分を入れれば公論の発行部数は恐らく五百部位にはな

つては貴重な資料で、県下各小学校高等学校には保存されていると思われる所以参考のために目次を一瞥すれば次の如くである。

卷頭の辞（佐藤寅太郎）故保科五無斎の逸事（矢沢米三郎）

保科百助君（浅井列）保科五無斎君を偲ぶ（森繁吉）飯山時代の保科先生（清水謹治）五無斎先生（井出弥門）五無斎研究（北村春畦）故保科百助君の靈に問う（脇水寿山）保科百助君（和田八重造）五無斎氏と地方地理（中村新太郎）奇傑保科五無斎先生を憶う（藤森良蔵）保科百助君の功績（八木貞助）神保博士と保科先生（三村邦雄）保科塾の前後（出浦四郎）保科君の一側面（小池久吾）保科百助氏（丸山弁三郎）五無斎保科先生（滝沢幾太郎）保科五無斎と僕（牛山雪鞋）五無斎氏の思い出（栗岩英治）五無斎先生の思い出（滝沢鼎吉）保科五無斎先生を想う（大井千尋）保科五無斎先生の奇行（青沼茂太）五無斎先生（荒木茂平）憶保科五無斎君（佐藤嘉市）五無斎保科君の事ども（大沢茂十郎）五無斎の片鱗（徳永晃岷）

其他地学関係で白倉委員の手によつて国会図書館の所蔵資料、長野図書館の所蔵資料なども採録する事が出来、その他池田可一、生島茂男、横沢理、保科健、大沢茂樹、吉村幹衛、出浦一

郎、其の他多数の皆さんから資料を心よくご提供下さつて刊行を助けて下さつたことに対し深く敬意を表する次第である。

尚昭和三十一年発刊された荒木茂平著「人間保科五無斎」は著者が五無斎の生前を知る人であり採集旅行に行を共に又私的な交際も深かつた一人でもあるので、五無斎を知る大切な書である。幸にして今尚豊饒としておられ五無斎を崇拜するの念厚く時に招かれて五無斎に就て講演などもされている。

三 編集について

この全集の編集の建て前としては、本全集が遺作集であり資料集であるという態度で臨んだので、その性格を堅持したため、多くの人々の五無斎に対する憶い出、逸話、逸事、批判、感想などを重視すべき事柄も遺憾ながら本全集からは除いて他日を期した。先ず読者に遺作をよく味読していただいて五無斎の本体をつかみ、各人が自らなる五無斎感を持つて、人間行路の資にされたいと願つたからである。

本を編むという仕事は仲々困難なことであつて特に沢山の貴重な遺作をどのように編むかということは家屋の建築や造園などと同じく先ずその骨組みには心を労するものがあつたのである。全集の骨組みとしては六つの編に分けたがその分類と系統づけ配置などは委員会の悩みとするところであつた。従つて読者の意に充たぬところが多いことをおそれるものである。

初頭の地学編は十二項に分けたが内容的には大体遺作の年代を主とし文の長短にはかかわりがない。この編の一は当時の信毎読

者以外には全く未知のものであり、明治三十四年より翌年にかけての第一回の県下採集旅行の結晶とも見られるものと推察する。二の岩石鉱物新案教授法（信濃公論の広告欄には新案を新式と書いてある）は五無斎の念願した全科目教授法の第一編を為すものであり、二編三編と全科目に及ぼしてやがて完成の暁は日本及び全世界の教授法の一大革新を促さんと五無斎自ら叫んで居るものであるが惜しい哉病に斃れ第二編通俗新案国語教授法の最初の部のみで終つている（論評編三論評の部参照）。當時形式劃一の教育法の弊害が論議されていた折からでありその影響の程も窺われる。四は礦物標本の説明であつて公論欠除のため一から十七までのないのは惜しいことであるが十及び七の標本説明書と共に地学上貴重な文献である五、六、九は標本出しに関するもので特に五の地学標本壳出に関する説明書は県下各校公署ばかりでなく全国中等以上の諸学校へ配布したものである。八は湖中の考古学的遺物調査を通して地質的の説明をしたものであるが、昨三十八年野尻湖に於て湖中の考古学的調査が行われ多大の成果を収めたと報じられているが、五十年前の昔に五無斎は諏訪湖及び野尻湖に於て先鞭をつけていたのである。十一は五無斎の愛読した蔵書に対し愛別能わざる情を述べたものであり、このことに就ては尙信濃教育第五〇七号九五頁の土屋良遵氏の「五無斎に関する二三のこと」を参考照されたい。

論評編は主として信濃公論に所載された資料が主要部分をなしでいるが五無斎百話と時事短評とは公論に連載されていたもので一つのまとまりを持っているので一項目づつにまとめ、他の遺稿

は諸論評として一括して一項を設け、それに広告類を配して四つの項目に分け、大体発表月日の順序に従つた。公論は前述のようになんか欠号があるのでそのため中には一貫しない点もあつて惜しい事である。百話は七十一で終つているがあとが見当らない。五無斎はよく百の字にちなんだ事を考えたようであるが本人も白しているように百助の名の然らしむるところである。（名の百助はヒヤクであつてモモではない）時事短評は欠号があるので分明しないが多分休刊前まで続いていたものと思われる。諸論評の項は五無斎が何を考え何を為さんとしているか縦横無尽の論評には意味の深いものがある。

日記編の機業日誌と機業地視察報告書は組版の関係で最後にまとめたがあとは内容や文の長短にかかわらず発表の年月順にした。これらの原文の多くは地学編に組み入れべき内容ではあるが日記体に書かれているものは大体日記編としてひとまとめにしたのである。一の売上帳三と最後の機業日誌及び視察報告書とを除き他は何れも公論所載のものである。売上帳三については貢数の都合上終りの方の筆墨購入者の氏名を略して編者註として人数だけを記しておいた事と判読し難い所が数ヶ所〇印になつてゐるのはお詫びしなければならない。あとは原本に忠実に間違いなきを期したつもりである。売上帳三、というからには売上帳の一と二があつた筈である。今迄手づるを求める多数の人を煩わして心当りを探したのであるが遂に見当らず残念である。これが探し出されたならばと再び県下の皆さんに協力を呼びかけたい。売上帳三、の来歴については左の文を参考にして頂き当時この仕事の衝に当ら

れた主任の芝田伍一郎氏及び信濃郷土研究会に感謝したい。

附 言

昭和四年一月の信濃教育に保科五無斎式の追憶記念号を出され、多数の士によつて五無斎の人と為りを説き、又逸事奇行を余すなく記された中に、晩年筆墨行商を東京から始めて来た記事はあるが行商の内容は知る由もなかつた。

多くの人の話では殆ど長野県中の学校諸官衛を荷車を引いて行商された由。内容を知りたくておつた矢先、偶然にも長野市後町斎藤静男氏が五無斎の売上帳を持して居られる由を知り、借用して見た處本文のような内容で、唯個人が所有しておられるだけでは惜しい気がして、氏の許しを得て原本其儘を幾分縮め、オフセット版として世に出すこととした。

柏与印刷所の尽力で原本と異ならない事を喜とした。尚氏の売上帳は巻参であるから、何處かに一、二はある訳だ。所有者を知りたい。

柏与の主人の好意で、日記を包むに故人の嗜好を汲み、酒屋で使う酒絞りの麻布を包紙代用の表紙として渋味を出した意を掬んで頂きたい。昭和十一年六月十六日尚奥附は編集兼発行人町田修三印刷人清水与助 発行所信濃郷土研究会となつている。

次に四の長野県地学標本採集旅行記は前記売上帳以上に貴重な文献であるが、これは眼疾（病床日記參照）治療直後であり、明治四十二年四月五日に出発して九月十八日に終つてゐるそれにつけても前にも一寸触れておいたように明治三十四年第一回の県下採集

旅行記が或いは当時の日刊長野か信毎に掲載されてはあるまいかと予想してその存否を確め得たかつたのであるが今のところはつきりしない。この二年に亘る旅行記が何处かに記事化されているとすれば第二回目の旅行記と共に幾多の事実が闡明されるであろう。さり乍ら第一回の旅行が明治三十四年五月一日に出発して翌年十一月に終つている事実をふまえてみるとそれから僅か一ヶ月余を経た三十六年一月九日の信毎紙上から通俗消稽信州地質学の話が連載されているので、これは旅行記風ではないが第一回の旅行記に代るものと一応考えたい。

狂歌編の「よいか」をほしな百首け」は明治三十九年十一月三日の発行になつてゐるがその売捌きについては各書肆各新聞店（本書雜篇九参照）を通じてなされており、その時の広告のちらしが申込券づきで今も残つてゐる。

原本には一首毎に惺々曉文、豊田笠洲林探樂の三氏によつて見事な狂歌がものさておりまさに興味深いものである。これに統いて狂歌集を出版すべく予告されているがそれは遂に発行に至らなかつた。ただその原案と見られるものが信教参考室に三十枚程現存している。五無斎が長年に亘り何回も県下を漫遊し多くの人々に接して至る所で作られた狂歌の数はけだしおびただしいものであると想像される。本書中に散見する狂歌と他の雑誌や個人所有のものを集めてこの編に加える事も考へたのであるがこれも他日を期することにしてやめることにした。県下に散在所蔵されてゐる幾多の狂歌がこの全集を機縁として所在が確められ整理がされたならばけだし興津々たるもののが生れるであらう。

書簡編はその所蔵者の探索に困難をした一つであつたが、信濃教育第五〇七号の記事によれば、五無斎が大豆島小学校から転任の際は下宿の大尺棚は私信の来翰で充満していたとのことである。僅か二年足らずの大豆島生活でこれだけの来信書があつたことから推し量つても県下をはじめ五無斎の書簡は数多いことであろう。然るにこの編に収められたものは友人知己親戚などごく僅かである。五無斎の書簡を保存されている方々は今後佐久教育会へ連絡をとり五無斎の生涯の上で分明しない点をそれによつて明かにして頂くことを望むものである。編中の吉村氏は五無斎と同郷であり煙嶺と号して俳歌をよくし村の長ともなり県議ともなつた地方の名望の士、五無斎とは肝胆一体で嗣子を遙々保科塾に入れて修学させており五無斎を心から信頼していた。大沢茂十郎氏は同郷でしかも師範の同級生で心からの盟友であつた。横沢氏とは親戚の間柄であり、出浦四郎氏は保科塾の数学教師として五無斎と起居を共にした仲であつてこの書簡は保科塾閉塾にも関係する重大視すべきものである。滝沢国作氏は五無斎武石学校在職中の生徒であり後一所の学校にもいた師弟以上の交りである。

雜編は信濃教育会に保存されていた五無斎に関するものを主とし津金寺境内建碑の記録その他を載せて参考にした。

年譜はもつと詳しいものを作るべきであったが、読者の多少の便をはかるに止めた。出生後から師範入学頃までのことが分明しないのは残念であるがあとは大体の消息はつかめると思う。五無斎が自ら語るように出生から修学時代教職時代地学研究採集時代標本作製売出し時代保科塾時代信濃公論時代筆墨行商時代等その

間仕事は錯綜はしていても一連の意味深い歩みをみるとが出来る。
扉及び本文中の写真の多くは中沢委員の手にかかるものである中には数十年前の写真を借用して撮したため鮮明でないものも見うけられ残念である。

四 今後の課題

本書が全集と名づけられ主要な遺作は収められてはいるが、前段にも希望を述べておいたようにまだ調査蒐集研究がなされなければならない点の数々を残している。このように考えてくると本書は五無斎に関してほんの一里塚の役目であるという感もないではない。

五無斎という号の由来一つをとり出してみても老嫗との問答のとき出来た狂歌から名付けたと五無斎自身が称しているのでこれは確実になつてゐるが何處で何日という事になると明瞭ではない。場所についても中沢照琳氏によれば（信濃教育第五〇七号）明治二十九年の頃南北佐久鉱物採集の際と記され、新案教授法によれば諏訪郡瀬沢としてある。果して何れによればよいのか。又その年代についても明かに出来なかつた。明治二十七八年頃の書簡には「靖洲」「靖洲居士」と号しているが本書の資料を検討してみて五無斎と称しているのは明治三十四年十月三日附の吉村源太郎氏宛の書簡が最初である。こんなことからも、参考になる書簡はないものか、第一回の採集旅行の記録はないものかと考えるのである。勿論格調の高い五無斎の心事、現実と理想の一体化のため

の力強い足どりを考えるとき、何日何處でということは問題にはならないとしても正確を期すべき根拠づけは為されなければならぬ。

今度の仕事で思うことの又一つの問題点は五無斎の在職していれた学校には当然あつて然るべき資料が失われ反つて一般在家に大切に保存されていたという事実である。五無斎没後幾星霜かを経た今日があるので無理からぬことはいうものの何かを暗示し皮肉な感も沸くのを禁じ得ない。「風間冠峯氏の讃辞についての」文の中にも「昨年（明治三十七年に當る）の夏頃なりしか予は数ヶ月間に亘つて予が教育に関する意見と満韓地方經營に係る考察とを公にし、教育者諸賢並に當局者各位の参考に供し副産物として予が私塾の主義方針をも広告的に発表せんと欲したることもある

りたり云々」と記してあるがこれにつながる資料が何処かにあることを期待するものである。何れにしてもこれから読者諸氏の手も煩し資料の所在をたしかめ資料を豊富にすることを願つてやまないものである。

小心が高志の遺作を編むことは木によつて魚を求むるよりも甚しい話である。併しだだ五無斎の人格は本書の中に躍つていることは編者一同のよろこびである。

終りに資料を心よく提供して下さつた方々、又困難な原文原稿に対しわが事として御協力下さつた信教印刷株式会社並びに信濃教育会出版部に対し編集委員会よりも厚く感謝申し上げます。

（編集主任 今井誠太郎）

五無齋保科百助全集

昭和 39 年 2 月 5 日 印刷
昭和 39 年 2 月 10 日 発行

長野県佐久市岩村田 3155

不 許 編集者 佐久教育会

電 話 岩村田 43
振 舞 長野 1788

複 製

長野市旭町 1098 印刷所 信教印刷株式会社

長野市旭町 1098

発行所 信濃教育会出版部

電話長野 ② 0291
振 舞 長野 10162

復刻 五無齋保科百助全集 全

昭和六十二年二月二十日 「非売品」

編集者 佐久教育会

発行者 佐久教育会

佐久市岩村田三五六一
⑤335 ⑩三五七
67 130回

製作 法人 信濃教育会 出版部

長野市旭町一〇九八

印刷・製本 信教印刷株式会社・佐野製本所

